

臨床倫理とナラティブのススメ —立ち止まり物語る倫理—

Clinical ethics and narrative ethics

金城 隆展

●琉球大学医学部附属病院地域医療部

1. 選択と倫理

「倫理」という言葉に対して、皆さんはどのような印象をお持ちでしょうか。「よく解らない」「取っ付きにくい」「難しそう」「正直、苦手」など、マイナスの印象を持たれやすい「倫理」だが、倫理とは詰まるところ「私たちが何かを選ぶことに関すること」であるがゆえに、誰もが日常生活の中で従事する身近な実践である。「人生は選択の連続である」とよく言われるが、言うまでもなく私たちは毎日、朝起きてから夜寝るまで、大なり小なりさまざまな選択をして生きている。しかしながら私たちは、幸か不幸かその一つひとつの選択をそれほど意識することなくやり過ごして生きていることができるのである。しかしながらアルベール・カミュが指摘しているように、私たちがこれまでしてきた（これからしていく）小さな選択、大きな選択の積み重ねが（未来の）私たち自身を作っている（作っていく）のである。この意味で私たちの人生とは「私たちが何かを選ぶこと」の総和であり、そのような選択の総和としての人生をどう生きるべきかを考えることが（広義の）倫理にほかならないのである。

2. 立ち止まる態度としての倫理

倫理とは詰まるところ、一つひとつの選択に真摯に向き合う態度・姿勢である。沖縄県立中部病院の本村和久先生によると、倫理とは「品行方正とか清く正しく」という印象があるかもしれないが、「何か正しいと思われることをきちんと行うこと＝倫理ではなく、現実の出来事をどう行えばよいのかをふりかえりつつ、次の行動を模索するのが倫理的な態度」である¹。臨床においてモヤモヤし「何かおかしいぞ」「これってどうなの?」「腑に落ちない」と感じたとき、そこでしっかりと立ち止まって何をなすべきかを考える態度・姿勢こそが倫理的なのである。すなわち、人生を善く生きるとは、立ち止まるべき選択を前にして立ち

止まり、熟考して善く選んでいくことを積み重ねていくことであり、その積み重ねの結果として「善い人生」を生きることができるとはのではないだろうか?

3. 臨床倫理の仕方

臨床倫理とは「床に臨む」倫理であり、それはまさに医療従事者が患者の枕元で実践する倫理である。そのような臨床倫理の仕方を考える上で、道徳と倫理の区別が非常に有用である。道徳とは私たちが他者と上手に関わり生きていくために習得してきた慣習、しきたり、マナーであり、文化や共同体、そして個々の経験に大きく左右されるという意味で非常に局所的で個別的である。これに対して倫理とは体系的に、1) 手順を踏み、2) 参照し、そして、3) 対話・協議しながら、私たち1人1人がもつ個別の道徳を普遍的に考えることである。手順を踏むことに関しては、①もやもや感・腑に落ちない感を大切に立ち止まる、②情報の収集・整理・評価、③倫理問題の認識と分析、④取りうる選択肢の吟味・益害の比較考量、⑤患者／家族／医療従事者による共同意思決定、という5つのステップを踏むことを推奨したい。参照することに関しては、①個別の道徳、②規則・綱領・ガイドライン、③倫理原則・倫理理論、④価値の源泉という4つのレベルを「倫理的はしご」を登るかのように、自分たちの考えや選択を照らし合わせることが肝要である²。対話・協議に関しては、自分の道徳は不完全であるが故に信頼しすぎることなく、独断・独善に陥らないように、1度で決めるのではなく手順を踏みながら、根気強く対話・協議を続け、1人ではなくみんな決めていくことが大切である。

物語とナラティブ

「出来事を選んで深く関連付けること」が物語であり、その核心は「つなげること」である。なぜなら、

つなげることが意味を創り出すからであり、この意味で物語とは意味の生成装置にほかならないのである。ナラティブとは「物語」と「語り」という2つの言葉を内包したものであり、語り手が物語を語り、聴き手が傾聴する形で物語を受け取り、さらに語り手に返すという具合に、物語が語り手と聞き手の間を循環しながら物語が展開・発展していく中で新しい意味が生じていく様、場、機会、プロセスがナラティブである。臨床とは、すなわち、患者が語った物語を医療者が傾聴して受け取り、それを再び患者に返すという物語の循環プロセスの中で、患者の物語が循環・展開しながら新たな意味が創り出される場と捉えることができるのである。

4. 答えはナラティブの中にある

ナラティブは決して「患者さんの話を聴くことって大事だよ」とか「患者さんの物語、感動したね」という話ではない。ナラティブとは、もはや大きな物語に寄り頼むことができない時代に生きている私たちが、絶え間ない対話と物語の循環を介して、皆で協働して意味を共に創り出す覚悟をすることである。ナラティブとは、専門家である私たちが患者の物語を奪い取りがちであることを深く認め、自分の属する文化を批判的に再吟味しつつ、患者を変えるのではなく、患者に向き合う自分の態度を変えることをいとわずに、専門家としての本分を果たしつつ、謙虚に患者に向き

合い続ける覚悟をすることである。ナラティブとは、患者が自分自身で病いや問題の意味を創り出していくことができる存在であると信じ、彼らが語る物語が彼らにとって本当に必要であり、その物語を彼らが生きていることを信じ、その物語の中に留まりながら物語を共に紡いでいく覚悟をすることである。ナラティブとは、患者が本当に困難な状況に置かれているとき、私たちには患者の物語を聴くことしかできないことがないと深く認めつつ、しかし物語こそが患者からの最高の贈り物であり、物語こそが私たちと患者がよい時期や悪い時期を乗り越えるために、互いに助け合うことができる唯一の方法であると心の底から信じることである。時には困難な問題に直面し、答えが解らず途方にくれ、答えを探し求めることがあるかもしれない。しかし、答えは決して哲学の本や倫理の教科書の中にあるのではなく、私たちが患者と一緒に紡ぐ物語の中にあるのであり、この意味で「物語る倫理」とは詰まるところ、患者の物語に向き合い、その中に留まろうと努力する態度・姿勢にほかならないのである。

文 献

1. 本村和久. 臨床倫理的なことを考えてみよう. レジデントノート. 2010; 11(12): 1697-1703.
2. Veatch RM./品川哲彦訳. 生命倫理学の基礎. 大阪: メディカ出版; 2003.